

入院患者のケアにおける日中比較からみる「脱家族化」の進捗

游天舒（北海道大学大学院経済学院）

「脱家族化」とは、福祉提供の担い手が家族から外部（市場や国家）へと移行する過程を指す。従来の比較福祉研究においては、主に育児や高齢者介護といった長期的かつ制度化されたケア領域における家族依存の程度が分析の中心となってきた。本研究は、入院患者のケアという一時的かつ偶発的なリスク場面に着目し、そのなかでの家族機能の外部化の実態を明らかにすることを通じて、日中における脱家族化の進捗を比較検討する。

先行研究としては、宮坂靖子（2022）による『ケアと家族愛を問う——日本・中国・デンマークの国際比較』が挙げられる。同書は、育児および高齢者介護を対象に、それらに付随するケアと家族愛の規範について国際比較の視座から包括的に分析している。宮坂は、日本および中国においてケアの具体的な様態に相違が見られるものの、両国に共通して高い家族依存が持続している点を指摘しており、愛情規範をめぐる脱家族主義の理念そのものの再検討を促している。

本研究は、こうした先行知見を踏まえつつも、脱家族化の進展において日中間に顕著な差異がみられる「入院ケア」という限定的かつ具体的なケア場面に着目することで、ケア実践に関する国際比較に新たな視座と理論的含意を提示することを目的とする。

本報告では、制度的背景、ケアに対する意識という二つの次元から、日中両国における入院ケアの実態を比較した。日本では「国民皆保険」制度により入院費の自己負担が軽減され、看護職による包括的なケア体制が制度的に整備されている。原則として家族の付き添いは認められず、面会にも厳格な制限が設けられており、入院中のケアの大部分は医療機関によって担われている。このような構造から、日本の入院ケアは高度に脱家族化されていると評価できる。

一方、中国では都市部を中心に医療保険制度や有料の付き添いサービス（護工）の市場化が進展しているものの、看護職の業務範囲は医療補助に限定される傾向が強く、日常的なケアは「市場」か「家族」のいずれかによって担われている。とりわけ農村部においては、家族がケアの中心を担い続けており、制度的支援や市場代替の整備は極めて限定的である。そのため、入院というリスク場面における脱家族化の進捗も非常に限定的であると言える。

加えて、2024年10月より、中国当局は「付き添いナシ病棟」と称する施策を一部都市において試験的に導入した。これは医療機関が提供する日常的なケアサービスに定価を設け、完全な医療機関主導によるケア体制の構築を目指すものである。現時点では小規模な試行段階にとどまるが、脱家族化を意識した制度的試みに位置づけられる。

看護職の職務内容を比較すると、日本では医療行為に加えて食事や清潔支援など広範なケアが担われるのに対し、中国では看護職は医療サポートに特化し、それ以外のケアは家族または護工に依存する傾向が強い。病棟における面会・付き添いのルールの違いからも、こうした構造的差異が明確に表れている。さらに、インタビュー調査からは、看護の専門性や制度的支援のあり方が、ケアに対する社会的期待や倫理観と密接に結びついている実態が確認された。アンケート調査では、入院時に誰がケアを担うと想定されているかのみならず、リスク対応における家族・市場・国家の役割分担に対する認識の違いも浮かび上がった。

本研究は、入院という偶発的なリスクへの対応を通じて、日中両国における福祉制度の構造的相違を脱家族化の観点から明らかにするものである。福祉国家のリスク対応能力やケアの再編のあり方を検討するうえで、家族・市場・国家の役割分担に関する今後の理論的・実践的議論に資することをめざす。

キーワード：脱家族化、入院ケア、日中比較